



TITLE:

『ビートン社の家政書』に関する 研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

妹島, 治彦

CITATION:

妹島, 治彦. 『ビートン社の家政書』に関する研究. 京都大学, 2016, 博士
(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19815>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	妹島 治彦
論文題目	『ビートン社の家政書』に関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、英国ヴィクトリア中期に出版され、中産階級や労働者階級上層までの読者の圧倒的支持を得て、ヴィクトリア期家庭生活のバイブルとされた『ビートン社の家政書（<i>Beeton's Book of Household Management</i> (1861)、後に <i>Mrs. Beeton's Book of Household Management</i>）の著者と一般にみなされている Isabella Beeton、及びその夫で刊行元の S・O・ビートン社 (S.O. Beeton & Co.) の経営者であった Samuel Orchard Beeton の、同書出版にいたる関与のありかたや、申請者が「家政書」という名の「料理書」であったとする同書の料理書出版史上における位置づけなどを主な内容としている。</p> <p>論文は「序章」「終章」を含め全 7 章からなる。序章では、初版以降もたびたび改訂重版がくりかえされ、今日においても料理レシピ集の代名詞として扱われる同書が、ここでは初版時の <i>Beeton's Book</i> ではなく、<i>Mrs. Beeton's Book</i> の題名で出版されていることを指摘し、題名の改変が、版権がワード・ロック・タイラー社 (Ward, Lock & Tylor) に譲渡された後に起きた事であり、すでに死去していたイサベラというまでもなく、初版刊行者であったサミュエルの意向にもそぐうものではないことを記す。この題名のためにか、同書が「著者」であるビートン夫人によって「執筆」されたものであるとし、またその「著者」を、家事経験豊かな老齢の家庭夫人であると想定し、その経験知が家庭切盛りのノウハウとして書籍化され、広範な読者に伝達されたものであるとする、ある種の神話化が生じた。しかし申請者は、イサベラが初版刊行時に、まだ 20 代の、結婚したばかりの女性であったこと、また同書の内容の大部分が、サミュエルが編集、出版に関わった <i>Englishwoman's Domestic Magazine</i> 誌に読者が投稿したレシピの集成であることを論証している。</p> <p>第 1 章「イサベラ・ビートンに関して」では、イサベラの結婚までの体験が伝記的に論じられ、特に、母親が再婚したヘンリー・ドーリングが、ロンドン南郊エプソムで、競馬場施設を管理運営する富裕な人物であったため、上層中流階級の女性としての素養を習得する機会に恵まれたことを強調する。夫のサミュエルとは幼馴染であったが、義父のドーリングは結婚に反対し、それをおしきる形で二人は結婚にいたった。そのぶん結びつきは強く、サミュエルが開始した出版事業に、当時の「アイドル・ウーマン」の理念に背いてイサベラは積極的に協力し、自ら編集者として参加したのではないかと申請者は推測する。</p> <p>第 2 章「サミュエル・オーチャート・ビートンに関して」では、主に出版史的側面から、夫サミュエルの出版事業についての詳細な分析がなされている。申請者は、サミュエルが出版事業を開始する以前に、紙類業者 (paper merchant) の徒弟として修業を行ったことが、人脈を培うのに貢献したこと、そうした人脈を活用しながら、さまざまにパートナーシップを変更しつつ、自らの S・O・ビートン社設立にいたったことを述べる。しかし同社は、取引銀行の破綻のあおりを受けて破産し、『ビートン社の家政書』や『ビートンのクリスマス年鑑』などの成功した出版物の版権が、同じ地域で営業され、設立時期も近かったワード・ロック社に譲渡された経緯についても、同時代の資料に基づき明らかにしている。ワード・ロック社はこれらの出版物を、「ビートン」の固有名詞を残したまま継続して出版している。</p> <p>第 3 章「伝統的家政書と『ビートン社の家政書』」は、ギリシアのクセノフォンにも遡る「家政書」の伝統の中で『ビートン社の家政書』を考察するものである。特にその</p>			

中で強調されているのは、近世ヨーロッパの家政書がうたった「全き家」の観念である。そこでは「家」は単なる家族ではなく、奉公人・使用人を含む拡大された集団を指し、家政は、家族生活の技術を越え、生産活動を含む「経営」そのものを意味する。『ビートン社の家政書』が料理書に他ならないことは明らかなが、同書序文が「料理書以上のものにしたい」と宣言していることに申請者は着目し、内容においてもレシピ以外にも医療、法律などさまざまな必要知識が配列されていることを指摘する。さらに同書の石版色刷りの口絵が、ヴィクトリア期の都市中産階級とはほど遠い、農家の戸口の牧歌的風景を描いていることを重視する。申請者によれば、ビートン社は家政書以外にも『ビートン社の園芸書』『ビートン社の愛玩動物の書』を刊行しており、これらが伝統的な家政書の主要な内容である「料理」「農業」「畜産」にそれぞれ対応しているのであると、近代的な生活スタイルに適応しながらも伝統的な家政書の系譜上にあることを論じる。

第4章「ドクター・ウィリアム・キッチナー—摂政皇太子時代的美食家の真実」は、科学者であり作家であった奇行の人キッチナーとその著作 *Cook's Oracle* (1817) を扱う。キッチナーは美食家として知られ、科学者、詩人、音楽家、画家、建築家などからなるクラブ「美食家委員会」を主宰し、自宅において定期的な会食を行った。そのような活動をもとに執筆したのが『クックス・オラクル』である。申請者は、科学者として経歴を開始したこの人物が、調理において身体への影響や、健康について明確に留意して、調理時間や食材、また分量などに正確さを強く求めたことをあげ、キッチナーのいう「合理的美食」が後の時代への食事に関する意識の形成の一つの起点になっていることを論じる。

第5章「イライザ・アクトンと『最新料理法』」は、『ビートン社の家政書』の先蹤ともいえるべき、アクトンの *Modern Cookery* (1845) をとりあげている。著者の生涯を紹介したあと、同書の出版にいたる経緯と、以降の各版における異同、累積の出版部数などを同時代の新聞広告や各版の調査から明らかにしている。

以上のように、『ビートン社の家政書』以前の代表的な料理書としてキッチナー及びアクトンの著書を取りあげた後、最後の「終章」では同一料理のレシピを選んで、それらの記述のスタイル、とくに紙面の効果などについての『ビートン社の家政書』との比較を試みている。申請者によれば同書が、「分析的索引」(analytical index)を備えており、しかもレシピを含むすべての項目に通し番号が付けられているため、前記の二書や他の類書と比べて必要な情報への接近がスムーズであったと述べる。索引そのものは先行したアクトンの書物にもあった。しかし『ビートン社の家政書』は、その索引を巻頭におき、「分析的」な機能を加え、ページではなく項目に直接辿りつけるようにしたことによってその斬新さがあった。紙面のレイアウトを含むそうした編集上の基軸が、当時他にも出版されていた料理書とのあいだに、レシピの内容や、材料、調理時間の指示などについては大きな差異がないにもかかわらず、『ビートン社の家政書』が他に圧倒的な差をつけて出版上の成功を収め、内容を改訂しながらも不朽のタイトルとして神話化していった理由であるとする。そのことは、サミュエル・ビートンの経営するS・O・ビートン社が、他の出版物においても、オリジナリティよりも徹底した実用性・有用性を志向したこととも関わっており、『ビートン社の家政書』の成功はまさに、イサベラ・ビートンとサミュエル・O・ビートンとの協力関係によるものであったと論じる。

最後にサミュエルが、イサベラの死後、自社の出版物である『日用料理百科』(*Mrs. Beaton's Dictionary of Every-Day Cookery*, 1865)の書名に初めて「ビートン夫人」の名を冠し、それがワード・ロック・タイラー社が版權を受け継いだあと、『家政書』において踏襲されたのではないかと推測を述べて論文を締めくくっている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文「『ビートン社の家政書』に関する研究」は、英国ヴィクトリア中期に出版され、中産階級や労働者階級上層の読者の圧倒的支持を得て、ヴィクトリア期家庭生活のバイブルともされた『ビートン社の家政書』(*Beeton's Book of Household Management* (1861)、後に *Mrs. Beeton's Book of Household Management*) の著者と一般にみなされている Isabella Beeton、及びその夫で同書の発行元であった S・O・ビートン社 (S.O. Beeton & Co.) の経営者であった Samuel Orchart Beeton という二人の人物の、同書出版にいたる関与のあり方や、申請者が「家政書」という名の「料理書」であったとする同書の、料理書出版史上における位置づけなどを主な内容としている。

同書は、料理や家政について専門的な関心をもつ人にとどまらず、19世紀以降の英国における家庭内の生活や女性の家庭内の役割について多少とも関心を抱く人であればその書の存在を知らぬ人はいない程に著名な書物である。また少なくとも20世紀前半までは実際に生活において応用可能な実用的なマニュアルとして内容を改訂しながら、摘要版なども含め、たびたび再版されており、この書物自体がイギリスの家庭において日常的な必需品であったともいえる。そうした後の版では書名に *Mrs. Beeton's* の語が冠せられており、わが国でもこの書物は一般に『ビートン夫人の家政読本』という書名で知られている。ビートン夫人こと、イサベラ・ビートンについての情報が多くなく（これほど著名であるにもかかわらず、*Dictionary of National Biography* (1885-1900) にも収録されず、ようやく1993年の一卷本の補遺 *Missing Biographies* で初めて項目化された）、また肖像も国立肖像画美術館が所蔵するポートレート写真一点しかないせいもあってか、イサベラ・ビートンは、この本の刊行時にまだ20代半ばであったにもかかわらず、書名中の「ビートン夫人」が、高齢で経験ゆたかな家庭夫人であり、その豊富な知識を、若い主婦や経験不足の料理人に書物の形で伝達しようとしたものというイメージが早くから定着した。もちろんいまでは、それが誤りであることが明らかにはなっているが、神話の痕跡はいまだ随所に見ることができる。本論文は、そうした神話を解体し、「ビートン夫人」の実像を明らかにし、そして *Mrs. Beeton's* という書名から類推されるようにイサベラ・ビートンは果たしてその「著者」であったのか、また出版者である夫サミュエルは、果たして前記のようなイメージのもとにこの書物を構想し、かつ発売したのか、といった問題を検討するために書かれたものである。そのような問題意識から必然的に、すべてに対して徹底した資料的裏づけを要求する、著しく実証主義的な方法を採用している。こうした「削偽訂実」ともいうべきスタイルと方法とが、本論文の第一の特色であり評価すべき点である。

そうした実証主義の一つの成果が、出版史及び書誌学上のさまざまな新たな知見の獲得や、従来曖昧であった情報の確認である。特にほとんど根拠のないままに、文献から文献へとひきうつされてきた出版部数をほぼ確定できたことは、最も基本的情報といえるだけに重要である。サミュエルが S・O・ビートン社を設立する以前に、他の多くの出版関係者とパートナーシップを交替しながら行っていた出版活動の履歴も、この研究によってほぼ明らかになった。『ビートン社の家政書』の内容の多くが、C・H・クラークと共同経営していた時代の Clarke, Beeton & Co. から刊行された女性向け雑誌、*Englishwoman's Domestic Magazine* の投稿記事から採られているだけに、このことも情報として重要な価値をもつ。のみならず、サミュエル・オーチャート・ビートンは、イサベラにもまして従来知られるところが少ない人物であり、サミュエルを単独に論じた研究さえほとんど存在しない状況なので、本論文の第2章全体が大きな貢献であるといつてさしつかえない。イサベラとサミュエル両者を合わせ

て論じ、その協力関係を明らかにすることができたこと、これが本論文の評価すべき第二の点である。

第三に評価すべき点として、『ビートン社の家政書』が新しい時代に適応した、著しく即応性を有する情報源として提供されていながら、なおかつ伝統的家政書の系譜上にあることを刊行者自身が意識していたことを、口絵図像を解析して論証したことがある。S・O・ビートン社が刊行していた同種の、かつ類似題名の書物、それぞれ料理と園芸と愛玩動物を扱ったBeeton's Bookのシリーズが、伝統的家政書が主要内容とした料理、農事、家畜の飼育を換骨奪胎したものであるという指摘は卓見である。料理書である同書が『家政書』と題されたことの原因がここにおいて初めて解明されたといつてよい。

第四に評価すべきは、時に見られる『ビートン社の家政書』の料理レシピが、先行する料理書からの剽窃や、読者投稿の焼き直しに過ぎないという批判を認めつつ、他の料理書と実際に紙面を比較することで、『ビートン社の家政書』が編集上の新機軸を導入していることを証明したことである。特に申請者が強調するのは、索引を巻頭におき、「分析的」な機能を加え、項目のすべてに番号をふり、あらゆる用途に応じて必要な情報の、ページではなく項目に、直接辿りつけるようにしたことであるとする。このことが類書も多く、内容においても径庭ないにも関わらず、『ビートン社の家政書』が他を圧して出版上の成功を収め、内容を改訂しながらも不朽のタイトルとして神話化していった理由であるとする。それゆえ、イサベラは「著者」としてではなく、編集者として評価されねばならず、また実用性・有用性を志向して出版物のラインナップを作成していた出版者のサミュエルとの強固な協力関係を築きえたことを「結論」にあたる終章で論じることによって、二人の伝記的な記述に多くの紙幅を割いた、第1章・第2章との首尾が一貫することになる。

もちろん不満もなくはない。特に、ウィリアム・キッチナーとその書物『クックス・オラクル』を扱った第4章は、興味深い内容であるが、ここであかびあがった「食事と健康」「食事と階級」という問題を、『ビートン社の家政書』において論じて、初めてこの章が論文の中で有機的関連性をもつことになるが、それは閑却されている。また第5章のイライザ・アクトンについては、これほど詳細な伝記的情報が必要か疑問である。イサベラ、サミュエル、また彼らの子どもや孫について触れるときにも、やや物語的なナラティブになるきらいがないとは言えない。とはいえ、このような不足や欠点を補ってあまりある重要な事実の発見と、卓越した着想があることにはまちがいない。多数挿入された図版もたいへんに貴重である。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年2月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版まで当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降